

隈部 俊宏, 金森 政之, 園田 順彦
齊藤 竜太, 山下 洋二, 富永 悌二
(東北大学神経外科学分野)

【目的】頭蓋内胚細胞系腫瘍の治療成績をまとめる。

【対象】1990-2007年に治療した初発114 [germinoma (G): 82, non-germinomatous germ cell tumor (NGGCT): 32] 例を対象とした。

【結果及び結論】G群では, ICE/CARE療法3回 + 全脳室系以上の拡大照射24Gyの治療成績が最良で, 現時点で一例も腫瘍再発を認めない。一方化学療法単独, 化学療法 + 局所照射では早期に再発を生じ, 治療成績は有意に劣った。放射線治療単独では, 長期完全寛解期間後にも再発は生じた。NGGCT群では, 1年半以降の死亡例はなく, 早期再発/死亡群と長期生存群に2極化した。NGGCT群では, 手術 + 放射線 + 化学療法にて, MRI造影病変の完全消失と腫瘍マーカー陰性化が目標で, これが得られた場合長期生存が期待できる。一方で治療中に腫瘍増大をコントロールできず短期間で死亡する症例が存在する。

11. 当院においてRosen T20プロトコールで治療した若年者骨肉腫12例

川上 貴子, 樋口智佳子, 簡野美弥子
高橋 憲幸, 目黒 亨, 仙道 大
三井 哲夫, 勝浦 理彦, 清水 行敏
早坂 清

(山形大学小児科)

土屋 登嗣, 小山内俊久
(山形大学整形外科)

【目的・方法】Rosen T20プロトコール (ADRを総量500 mg/m²未満とした) を施行した若年者骨肉腫患者12例の, 生存率, 予後因子 (年齢, 部位, 腫瘍径, LDH, ALP, 術式, 腫瘍壊死率, MTX血中濃度到達率), 合併症を検討した。MTX血中濃度到達率は, 最高血中濃度1000 μ Mに達した投与回数率とした。

【結果】男児10例, 女児2例。年齢中央値は10歳5か月, 観察期間中央値は68か月。死亡例は2例でいずれも再発。Kaplan-Meier法で, 5年

OSは90%, EFSは80%。予後因子では, OSでMTX血中濃度到達率60%未満, EFSでは術式が切断, 全摘腫瘍壊死率70%未満が有意に予後不良であった。合併症は, 8人で感音性難聴が, 2人に心筋障害がみられた。

【結語】T20プロトコールで比較的良好な治療成績が得られた。MTX血中濃度到達率および壊死率が低いものは, 有意に予後不良であった。

第50回中国四国小児がん研究会

会 期: 平成21年3月28日

会 場: 高知医療センター

くろしおホール (高知県高知市)

会 長: 佐々木 潔

(高知医療センター小児外科)

1. 化学療法終了後残存した骨病変が良性であった神経芽腫 (病期4) の1例

所谷 知穂, 藤井 洋輔, 中村 亮介
曾我まゆみ, 金澤 亜錦, 宮澤 真理
高橋 章仁, 片岡 功一, 西内 律雄
吉川 清志

(高知医療センター 小児科)

薄井 佳子, 佐々木 潔
(高知医療センター 小児外科)

症例は5歳男児。発熱, 股関節痛にて発症の神経芽腫 (病期4)。全身に骨転移を認めていた。化学療法, 腹部腫瘍摘除 + 術中照射, PBSCT後, 効果判定の骨シンチグラフィにて左脛骨にのみ集積が持続していたが, MIBGシンチグラフィは陰性であった。残存病変と考え, 放射線療法を予定していたが, 各種画像検査にて良性骨病変の可能性も否定できず, 生検にて線維性異形成と確定診断した。

2. 肝臓原発と考えられる神経芽細胞腫の一例

佐野 薫, 板谷 喜朗, 緒方さつき
金城 昌克, 小笠原敬三
(倉敷中央病院外科)